

江戸幕府の医療制度に関する史料(九)

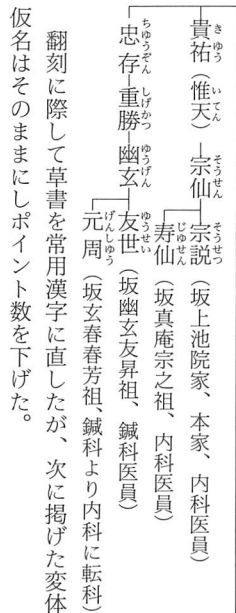
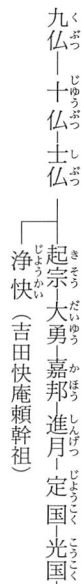
(その一) — 坂四家の『官医家譜』など(一) —

香 取 俊 光

これまで三回にわたって東京大学史料編纂所蔵の『官医家譜』(請求番号二〇六五—一六)より鍼科医員の家系について紹介してきた。二回に分け坂四家を紹介するが、全て鍼科医員というわけではない。鍼科以外の坂家も、江戸幕府の医師としては重要な家系なので合わせて紹介したい。今後はこのシリーズで、国立公文書館所蔵の『江戸城多門櫓文書』の医学関係史料を暫く紹介し、幕末の医師の出自・経歴などの身分を示した『明細短冊』を紹介する。

さて、坂家の家系について略系図を参考に見ると、室町初期より医家の名門で、家系のはっきりしている初代九仏は足利尊氏に寵愛され、博学多才で医術の他に和歌でも世に知られていた。一族に吉田快庵頼幹家があり、江戸時代に幕府の内科医員となった。直系の子孫は江戸時代に四家に分かれ、それぞれ幕府に仕えた。一番目に紹介する上池院家・二番目の真庵宗之家は内科の家系、三番目の幽玄友昇家は鍼科医員の家系で、初代寿三幽玄は幕府初の鍼科医員に登用され、以後明治になるまで鍼科医員を勤めた。四番目の玄春春芳家は初代元周が鍼科医員を勤め、二代目元猷が途中で内科に転科

した家系である。



而(て)、者(は)、茂(も)、江(え)・へ、与(と)

また、史料中に尊敬の意味を表現するためにその対象の名称の前に一〜二文字分を空ける關字や、より尊敬を表すため文章途中から次の行頭に改行する平出、最も尊敬を表すため当たって關字は何も注釈を付けず一〜二文字分を空け、平出や拾頭は二文字分を空けその行間に(平出)・(拾頭)と注釈を付した。また、破損のある場合は、一字分につき一つの□で、字数の不明なものは「 」で示した。句読点は、筆者が付した。

史料中の() は筆者が『新訂寛政重修諸家譜』全二十二冊、索引四冊(統群書類従完成会。以後『寛政譜』と略す)・『徳川諸家系譜』第一(統群書類従完成会、一九八二年)等で補足し

た。

なお、『寛永諸家系図伝』第十五(一四五〜一五〇頁、統群書類従完成会、一九九四年)は九仏の祖に克角の名が見え、宗説・寿仙の代までの代々の事績が記載されている。『寛政譜』と若干の記載の差があるので参照されたい。

一番目に紹介する「坂上池院家系譜」は、『官医家譜』十四に所収されており、『寛政譜』第五(二六四〜六頁)の方が、室町時代以来の医師の家系の記載があり、十仏が足利尊氏に寵愛された記事や個々の経歴は詳しく、母・妻・兄弟姉妹・法名等の記事もある。江戸時代には、内科の医師として幕府に登用され、子孫も明治になるまで内科の医員を勤めた。

源姓

東照宮(徳川家康) 御代

坂

家紋 三ツ桔梗

高五百石

(九仏) — (十仏) — (十一仏)

〔(起宗) — (大勇) — (嘉那)
(浄快) 吉田快庵頼幹祖〕

(進月) — (定国) — (光国)

坂三郎光角十六代之後胤坂上池院法印光国惣領

上池院 民部卿

貴祐(惟天)

先祖より京都將軍(足利)家昵近後織田信長太閤(豊臣)秀吉江仕慶長三年八月八日死六十八(六)才京都黒谷(真如堂) 東陽院二葬

(忠存) 法常坊 勝顯院 法印 坂幽玄友昇祖、鍼科医員

(定智) 民部卿 法印

(寛胤)

上池院 民部卿

宗仙(宗徳、洞庵)

慶長十三年七月八日伏見ニ於而(拾頭) 東照宮(徳川家康)江

初見同年十月駿府(徳川家康)江被召代々 公方之医師

台徳院殿(徳川秀忠)江奉仕すへき旨にて五百俵賜同

月江戸へ下り同年十一月 台徳院殿(徳川秀忠)へ初

見 東照宮(徳川家康)より薬材并蜂蜜拜領元和五年

五月七日死四十四(八才)(法名宗徳) 日暮里(谷中)南泉

寺二葬(妻は近藤源五左衛門正之が女)

大猷院殿(徳川家光) 御筆鶴鶴之御絵

(織田) 信長より濃州(美濃国) 山方千石之黒印を拝受

(玄昌) 上池院 法印

(柱殿)

(元和三年台徳院殿にまみえたてまつり、同九年八月五日に死す。二十八才。法名玄昌。葬地惟天貴祐に同じ京都黒谷真如堂東陽院)

(女子)

上池院 民部卿

宗説(しょうせつ)

(寛永元年十一月初めて(徳川)秀忠・家光に拝謁し、これより仕え奉り、廩米三百俵を賜う) 大猷院殿(徳川家光)

御代御側醫師家督(寛永十一年十二月法印に叙し、慶安二年厳有院殿(徳川家綱)親筆の神農の御讃を賜う。同四年九月十五日奥医に列す)寛文元年八月十四日死五十四才(法名全久)谷中堅湖山玉林寺ニ葬(のち代々葬地となる。母は正之が女。妻は細川紹高全隆が女)

(拾頭)

厳有院殿(徳川家綱)神農之御画拝領

(女子) 京都仏光寺の新坊某が妻

(女子) 朽木清性院が母

(祖先) 雪岩 常照庵

(女子) 大奥に仕え、老女を勤め岡野と称し、廩米三百俵を賜う)

(寿仙) 坂真庵宗之祖、内科医員)

(宗真) 実庵 兄寿仙の養子)

宗純(しゅん)

上池院 民部卿 四郎三郎

寛文元年十二月二十(十)日家督(二十六日初めて徳川家綱に拝謁し、同三年十二月二十八日法印に叙す)延宝二年(三月二十七日)四月五日御番医師(同四年七月十二日叔母岡野が末期に請い申すにより、その廩米の内二百俵を加増せらる)同五年五月十一日御側醫師貞享元年五月六日御番医師二年八月十四日奥医師元禄(十年七月二十六日)十一月二日地方ニ直し賜(常陸国鹿島・茨城両郡の内において五百石を知行する)同年十月十八日小普請同十四年(十二月十二日)隠居(致仕)同十五年三月十七日純翁ト改正宝

永元年五月十四日死六十八才(法名玄清)同寺ニ葬(母は細川全隆が女。妻は近藤織部重直が女)

(女子) 鶴殿新三郎長好が妻)

(元隆) 宗仙 細川紹高全隆が養子)

(女子) 叔母岡野が養女となり、大友近江守義孝に嫁す)

(女子) 松田六郎右衛門某が妻)

東林(とうりん)

上池院 民部卿

元禄十四年十二月十二日家督小普請同十五年三月十一日(徳川綱吉に)初見享保十二年十二月廿六日小石川養生所御用元文元年(五)十一月晦日寄合延享元年十一月二日死六十八才(法名東林)同寺ニ葬(母は近藤重直が女。妻は本目権之進正峯が養女)

(宗胤) 民部卿 兄東林が養子)

(女子) 中島氏が妻
 (女子) 大奥に仕える
 (義直) 左平太

(宗胤) 民部卿
 (実は宗純が二男。東林が嗣となり、のち父に先立ちて死す)
 (正純) 清右衛門

実宗純次男民部卿宗胤惣領
 上池院 大之進

満宝
 享保十六年十月朔日嫡孫承祖延享元年十二月廿二日家督寄合同二年三月廿五日(徳川吉宗に初見安永二年十二月廿八(九)日死四十九(五十二)才(法名慈恭)同寺ニ葬(母某氏が女)

(実数原通玄白英が二男)
 (宗胤) 式部卿
 (元瑚)

(満宝が養子となり、その女を妻とする。明和四年十二月九日初めて徳川家治に拜謁し、のち故ありて兄通胤元国がもとに帰る)

実吉田梅庵法眼郷美四男
 上池院 民部卿

(宗恭)

明和七年九月廿二日躰養子安永三年三月八日家督小普請同年三月(二十二日徳川家治に)初見同六年十一月廿(六)八日家業出精ニ付寄合天明八年三月廿八日死四十(三)四才(法名独照)同寺ニ葬(母は某氏が女。妻は坂満宝が養女)
 (女子) 実は内田玄寿惟言が女。最初元瑚が妻となるが故あつて実家に帰る後、宗恭が妻となる

(某) 源吉 早世)

中務卿 文助

(宗孝)

天明八年六月四日家督小普請(時に十七才)寛政六年(徳川家斉)初見

(某) 大吉

(女子)

(正矩) 雄五郎)

次に同家の系譜を『医家藩翰譜』一(国立公文書館所蔵、請求番号一五五一一)でも確認してみよう。ただし、『官医家譜』や『寛政譜』に比べて簡単な記載である。

五百石
 寄合医師
 坂 上池院 宗孝

坂上池院(宗孝)の先は清和源氏撰津守頼光の後胤なり。医を以て業とす。紋は桔梗を用ゆ。中興坂上池院法印貴祐(推天)にて豊臣(秀吉)殿下の時には業をつかせらる。其後(拾頭)東照宮(徳川家康)に謁見し奉る。其子坂上池院宗仙ハ京都に生れにして慶長十三年戊申の七月八日伏見に於て初て謁見し、伏見より江戸に出府(拾頭) 台徳公(徳川秀忠)に附させらる、旨本多佐渡守正信 約命を伝ふに依て下向し、年俸五百俵を賜ふて寄合となり、元和五年己未の五月七日に死去せり。銅庵宗仙と号す。其子坂上池院宗説(拾頭)を 台徳公(徳川秀忠)の御附、元和五年己未に父上池院(貴祐または惟天)か遺跡を承継して百俵を給ふ。(拾頭) 大猷公(徳川家光)の御時に至りても父の業を勤め法印に叙せられ、寛文元年に死去せり。其子坂民部卿(宗説)ハ 厳有公(徳川家綱)の御時寛文元年辛丑十二月十日父上池院(宗仙)か遺跡相継し三百俵を嗣て、又上池院と改む。延宝四年丙辰十二月十三日大奥の老女岡野の願に依て、其後二百俵を上池院(宗説)に御加増にて五百石となりしか、元禄十四年に病死せり。代て谷中瑞応山南泉寺葬り候やとかや。其子坂民部卿(東林)ハ元禄十四年辛巳十二月十二日父上池院(宗説)か家督を相継し、五百石を給りて、又上池院に改む。寄合の御医師となり、延享元年甲子十一月二日に死去し、谷中玉林寺に葬り、法号を泰樹院高岳東林と号す。其子坂上池院満宝、延享元年子の冬父上池院(東林)家督を継、五百石を承継し、安永二年癸巳の冬十二月廿八日に死去せしかハ谷中玉林寺に葬り、法名を徳温院謙翁慈泰と号し

候や。満宝(ちんたか)子なくして吉田梅庵郷美か四男を養子とし、これ又養父上池院(満宝)か家督を継ぎ、知行五百石を承継して寄合の御医師となり上池院宗泰といふ。天明八年戊申の春三月廿六(八)日に死去しければ、玉林寺先統の側に葬り法名を澄潭院寒月独照と号しける。其子中務卿宗孝、上池院(満宝)か遺跡を相継し五百石を給り小普請組也。其後又上池院改む。此家に先祖に上池院貴祐か頃よりの日記を蔵書すと云う。

この史料の末尾にある「上池院貴祐か頃よりの日記を蔵書す」とあり、この日記を『補訂版 国書総目録』第三巻(六七二頁、岩波書店、一九九〇年)で確認すると『坂日記』とあり、国会図書館、内閣文庫などに所蔵されている。著者は、国会図書館諸蔵本『坂上池院日記』九冊を閲覧した所、医療より政治の項目が主に記載されていた。幕府の編纂した正史『徳川実紀』の基礎資料の一つとなっている。参考に『坂上池院日記』九(元禄九年正月〜六月分)より幾つか紹介してみよう。

『坂上池院日記』の元禄九年(一六九八)正月十七日条には、

一同十七日(徳川綱吉)巳刻紅葉山 御宮へ 御参詣
一御三家方(水戸綱条・尾張綱誠・紀伊綱教) 甲府殿(綱豊)
ヨリ御使番御機嫌伺ニ被差上於 躑躅之間山城守(戸田忠昌) 被謁之候

一大手内桜田御門番 榊原式部大輔 水野隼(人)正為伺
御機嫌登 城

一日光御目付代 妻木彦右衛門(頼方)

とあり、これを『徳川実紀』同日条で見ると、

十七日(徳川綱吉)紅葉山 御宮に御参なり。井伊掃部頭直該先導し。土屋相模守政直御簾をかかげ。黒田豊前守直邦御太刀。三間大隅守政房御刀もち。稲垣対馬守重富御沓奉る。供奉は御側曾我播磨守助興。島田大和守利由。予参は阿部豊後守正武。戸田山城守忠昌。土屋相模守政直。呢近松平右京大夫輝貞。少老加藤佐渡守明英。陪拝尾張中納言綱誠卿。紀伊宰相綱教卿なり。使番妻木彦右衛門頼方日光山目付代仰付らる。護持院大僧正隆光まうのぼり薬師経を講ず。よて綿を給ふ。(日記。坂上池院日記。寺伝)

と、『坂上池院日記』には四項目あり、『徳川実紀』には三項目あつて、綱吉の紅葉山参詣と使番妻木頼方の日光山目付代任命の記事が共通事項である。しかし、ここの項目は『坂上池院日記』の記載が乏しい。また、『徳川実紀』に登場する護持院大僧正隆光の日記『隆光僧正日記』³⁾の同日条を見ると、

一十七日、(徳川綱吉)紅葉山御社参、四つ時相済、七つ時登城、当年中毎月十七日薬師経講之、今日開白之、如例真綿百把拝領之、

とさらに詳しい様子が分かる。次に、『坂上池院日記』の同年六月二十九日条を見ると、

一同二十九日殿中無別条

とあり、『徳川実紀』には何の記載もない。さらに、先の『隆

光僧正日記』で同日条を見ると、

二十九日、御講尺之苦也、早朝ニ御延引之旨、御奉書到來、依之、出羽守殿(柳沢吉保)へ奉窺御機嫌之所、

(徳川綱吉)御疝気痞之由、

と、將軍綱吉の御前の勉強会が行われる訳であつたが、綱吉の疝気で痞があるために中止となつたことが分かる。

屋敷についてみると、延宝年中(一六七三〜八一)に小川町(千代田区神田錦町一〜三丁目、神田小川町二丁目。図1参照)⁵⁾には、(図の上が南、左が東)図の左側の道(神田橋門)を下がつた真手中右手の屋敷(東側の道を北に上り道の西側)であり、元禄九年(一六九八)に「たやす(田安門)」⁶⁾同十一年(一七〇〇)に田安門外より小石川内まで(千代田区富士見一・二丁目、飯田橋一〜四丁目。図2参照)⁵⁾には、図の左下(右下が西、牛込門がある)にある。さらに、職員録の橋本博編『増補改定大武鑑』上・中・下(名著刊行会、一九六五年。以下「武鑑」と略す)を見て行くと、延宝三年(一六七五)には、

惣御医師

三百俵

たか所丁

とあり、天和元年(一六八二)には、

(惣御医師)

五百石

とあり、天和三年(一六八三)には、

(惣御医師)

坂 上池院(宗純)

坂 上池院法印(宗純)

延宝年中之形

(一六七三—一六八一年)

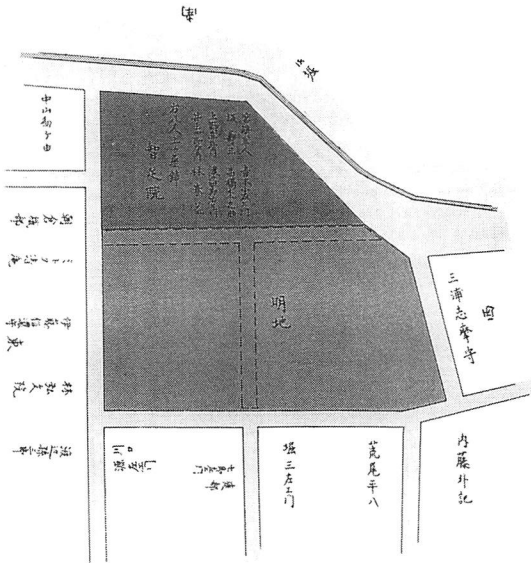
図 1



貞享五辰年之形

(一六八八年)

図 2



五百石 坂 上池院法印 (宗純)

とあり、元禄四年 (二六九二) には、

(惣御医師)

五百石 坂 上池院法印 (東林)

とあり、宝永元年 (二七〇四) には、

(惣御医者)

五百石 坂 上池院法印 (東林)

田やす 坂 上池院法印 (東林)

とあり、宝永七年 (二七二〇) には、

(惣御医師)

五百石 坂 上池院法印 (東林)

田安御門外 坂 上池院法印 (東林)

とあり、正徳二年 (二七二二) 檀栢を表す『御家人分限帳』(近

藤出版、一九八四年) を見ると、

(小普請組大久保淡路守致福組) 上池院 (宗純) 子

五百石 常陸 坂 上池院 (東林)

西三十

とあり、『武鑑』正徳三年 (二七二三) には、

(惣御医師)

五百石 坂 上池院法印 (東林)

田安御門外 坂 上池院法印 (東林)

とあり、享保三年 (二七一八) には、

(惣御医師)

坂 上池院 (東林)

とあり、享保十七年 (一七三三) には、

(惣御医師)

坂 上池院 (満宝)

とあり、元文六年 (寛保元年、一七四二) 以降は、

(寄合御医師)

坂 上池院 (満宝)

とある。文化八年 (二八二二) 六月禄『官医分限帳』(国立公文

書館所蔵、請求番号一五一―一八八) には、

高五百石 坂 上池院 (宗孝)

とあり、さらに国立公文書館所蔵の文政度 (一八一八―一八二

九) 『官医分限』(請求番号一五一―一七八) には、

一 五百石 坂 上池院

とあり、石井良助監修・小川恭一編著『江戸幕府旗本人名事

典』第二卷 (二八―一九頁、柏書房、一九八九年) 以下、『旗本事

典』と略す) には、寛政十一年 (二七九九) 『寛政呈書 国字分

名集』と文政十年 (二八二七) 頃『幕士録』を示すもので、以

下の記載がある。

項目 寛政十一年 (二七九九) 文政十年 (二八二七)

名前 坂上池院宗孝^{むらなかと} 坂上池院

禄高 五百石 五百石

知行地 常陸 〃

本国 山城 〃

本姓 源義光土岐流 〃

番役筋 (医家) 〃

勤仕時 台廟

(台徳院徳川秀忠代慶長十三年)

家紋 三桔梗

年令 未二十八

役職 小普請渡辺一番

寺 (谷中玉林寺)

屋敷

青山権田原

青山権田原

当分小川町表神保小路

当時小川町稻荷小路

参考文献・注

- (1) 拙稿「江戸幕府の医療制度に関する史料(六)——鍼科医員島浦(和田)・島崎・杉枝・栗本家系図『官医家譜』など」(『日本医史学雑誌』四十一—四、一九九五年)、「同(七)——鍼科医員上田・吉田・山本・畠山家『官医家譜』」(『同』四十二—一、一九九六年)、「同(八)——鍼科医員佐田・増田・山崎家『官医家譜』など」(『同』四十二—四、一九九六年)。また、盲人鍼医杉山和一については、拙稿「杉山和一の文献と伝説」(『理療の科学』十八—一、一九九四年)、「杉山和一の屋敷と杉山流鍼治講習所について(一)」「(二)」「(三)」「(四)」「(五)」(『医道の日本』五十四—十、五十五—七、一九九五年・一九九六年)、鍼科全体については拙稿「江戸幕府における鍼科と盲人の鍼科登用に関する研究」(長尾榮一教授退官記念論文集『鍼灸按摩史論考』、一〇—一四六頁、桜雲会、一九九四年)。「江戸幕府における鍼科医員と盲人鍼医(一)」「(二)」「(三)」「(四)」「(五)」(『理療

の科学』十六—一・十七—一、一九九二年、一九九三年)を参照されたい。

(2) 小川春興は『本朝鍼灸医人伝』(半田屋、一九三三年)で、『医官家譜』などを使い幕府の鍼科の医員を多く紹介している。坂家については、二番目の家系の寿仙(六三頁)、三番目の家系の立雪(元周、六四頁)、四番目の鍼科の家系の幽玄(六四頁)・寿三(友世、六五頁)・友正(六五頁)・友章(六六頁)・友貞(六六頁)・友信(六六頁)・友昇(六七頁)を紹介している。

一番目の坂上池院宗仙、二番目の坂真庵宗之家の菩提寺瑞応山南泉寺について、河原芳嗣「江戸・大名の墓を歩く」(二四六・七頁、六興出版、一九九二年)をみると、臨濟宗で、住所は東京都荒川区日暮里三—八—三(日暮里駅下車七分)、中興開基は宗説の妹岡野(大奥の老女)で坂一族と共に葬られている。同寺には、横山大観・近江西大路二万石の大名市橋家の墓がある。

(3) 吉田快庵頼幹家の家系については『寛政譜』第五、二七—二七二頁を参照。菩提寺は、臨濟宗金地院(芝公園三—五—四)で、小曾戸洋「都下医名家墓散策」(7)坂盛方院—吉田浄元・浄友(『漢方の臨床』三五—七、一九八八年)を参照。同寺には、堀杏庵家(小曾戸氏同シリーズ(6))、『漢方の臨床』三五—六、一九八八年)、吉田意安家(小曾戸氏同シリーズ(12))、『漢方の臨床』三六—四、一九八九年)、吉田宗活家(小曾戸氏同シリーズ(13))、『漢方の臨床』三六—六、一九八九年)等の名医の一族の墓がある。また、河原前掲書によれば、陸奥盛岡・八戸・盛岡新田(七戸)藩南部家、伊

予西条藩一柳家の墓がある。

- (4) 永島福太郎他校訂『隆光僧正日記』全三冊(史料纂集、続群書類従完成会)。護持院隆光僧正(一六四九〜一七二四)は、幕府の爛熟期の元禄時代に活躍した人物である。五代將軍綱吉の生母桂昌院の信任が厚く、柳沢吉保と共に側近で文治主義を徹底させ、生類憐れみの令の発案者としても有名な人物である。医学史上でも重要な内容を含み、政治・宗教の両分野にわたる記事に交り、綱吉・桂昌院・柳沢吉保・諸大名、そして隆光自身等の病氣・病状・治療等についての生々しい記事が見られる。隆光僧正の日記の医事については、拙稿『元禄時代の鍼・灸・按摩・医学史料』附『隆光僧正日記』医師・医事索引』(『理療の科学』二十一、一九九七年)を参照。
- (5) 『江戸城下武家屋敷名鑑』上・人名篇(原書房、一九八八年)、『江戸城下変遷絵図集』全二十巻(原書房、一九九三年)を参照。
- (6) 石原明「元禄九年の官医名簿」(『日本医史学雑誌』九一二、四八頁、一九五八年)参照。
- (7) 拙稿「江戸幕府の医療制度に関する史料(四)―文化六年六月録『官医分限帳』―」(『日本医史学雑誌』三十六―四、一九九〇年)を参照。
- (8) 拙稿「江戸幕府の医療制度に関する史料(五)―文政度『官医分限帳』―」(『日本医史学雑誌』三十七―三、一九九一年)を参照。

(群馬県立盲学校)